

アニマルウェルフェアへの取り組みと共に 安全・安心を追求した甲州牛生産の匠

—八ヶ岳の大地で牛と歩む未来へ—

原 廣一・奈美（肉用牛一貫経営・山梨県北杜市）

地域の概況

原氏の農場がある北杜市は県北西部に位置し、八ヶ岳や南アルプスの豊かな自然に囲まれた地域である。標高が高く、清涼な気候と長い日照時間を生かした農業が盛んで、特に

水稻栽培が中心となっている。

畜産業では、乳用牛と肉用牛の飼育および鶏卵やブロイラーの生産も行われ、農業産出額に占める畜産の割合は約16.1%となっている。畜産は耕種農業と密接に連携し、粗飼料の生産や堆肥の活用を通じて循環型農業の一翼を担っている。

経営・活動の推移

【夫妻そろって「和牛肥育の匠」】

和牛肥育に40年間取り組んできた先代が令和元年に急逝し、廣一氏が経営を引き継いで今年で7年目を迎える。廣一氏は山梨県立農業大学校（現山梨県立農林大学校）で畜産を4年間学び、山梨県酪農試験場（現山梨県畜産酪農技術センター長坂支所）に4年間勤務。その後（公財）山梨県子牛育成協会に20年間勤めた。



（写真1）家族写真

（表1）経営・活動の推移

年次	作目構成	飼養頭数	飼料作付面積	経営・活動の内容
昭和53年	肉用牛一貫 稻作（214a）	繁殖牛5頭 肥育牛15頭	116.9a	廣一氏のご両親が32歳で就農 廣一氏の父は農協勤務との兼業
平成27年	肉用牛一貫 稻作（214a）	繁殖牛25頭 肥育牛50頭	467.6a	結婚と同時に奈美氏が経営に参画
平成29年	肉用牛一貫 稻作（214a）	繁殖牛25頭 肥育牛50頭	467.6a	畜産クラスター事業で繁殖牛舎を増設
令和元年	肉用牛一貫 稻作（214a）	繁殖牛30頭 肥育牛50頭	467.6a	廣一氏が経営を継承
令和7年	肉用牛一貫 稻作（214a）	繁殖牛42頭 肥育牛98頭	467.6a	自己資金の中で規模拡大

また、妻の奈美氏も鯉渕学園農業栄養専門学校で畜産を学んだ後、同協会に7年間勤務。夫妻ともに家畜人工授精師および受精卵移植師の資格を有しており、飼養管理技術に優れている。大型特殊免許を取得しており、高度な飼養管理技術と給餌および自給飼料生産作業において高い効率性が実現している。

【飼養管理の見直しと作業効率の向上】

令和4年から稻WCSを育成段階に給餌することが増体に効果があるという研究結果を参考に育成牛にも稻WCSを給餌し、良好な体格づくりを目指している。



(写真2) 首に装着したウェアブルデバイス

また夫妻で(株)ファームノートの「Farmnote Color」を活用し、労働時間の省力化と繁殖台帳の共有による成績の向上を図っている。さらに繁殖管理にだけでなく、育成・肥育の出荷・治療に関する記録データの蓄積・活用にも取り組み、総合的な生産性向上を実現している。

また、自給飼料をコーンサイレージから牧草に転換することで作業効率を高め、飼養管理に集中できる環境を整えている。

経営・技術の特色等

【県内産にこだわる「甲州牛」生産】

出荷牛のうち98%以上が「甲州牛」認定という好成績を誇り、枝肉共進会では優秀賞等を多数受賞、令和5年には最優秀賞を受賞した県内トップクラスの生産者として高く評価されている。安全・安心への取り組みとして、自給牧草と稻わらを給餌し、粗飼料の自給率は80%に達している。また地域の粗飼料活用にこだわり、地元の稻WCSを積極的に活用している。安全性が担保された粗飼料を給餌しており、県内産にこだわってこそ「真の甲州牛」という信念を持っている。



(写真3) 金賞受賞



(写真4) 牧草地と牛舎から富士山を望む

【自給飼料の取り組み】

圃場が7ヵ所あり、すべて車で5分以内の距離に位置している。多年草は5月～10月にかけて4番草まで収穫し、单年草のライ麦は収穫量が落ちるため3番草以降の刈り取りはしない。草地の管理ではギシギシ防除や15cmの高刈りで再生促進、秋の強度更新など草地の安定的維持に向けた工夫を凝らしている。

【高度な人工授精技術】

令和2年に家畜人工授精所を開設しており、県内では唯一生産者による開設事例として、地域の畜産の中核を担っている。地域の酪農家のホルスタインを借り腹とした和牛の受精卵移植を実施し、生後70日で買い戻す仕組みを導入している。毎年数頭を買い戻し、令和6年は2頭を繁殖牛として飼養している。出荷した牛はすべて甲州牛の認定を受けた。酪農家は子牛販売で安定的な収入を得ることができ、本経営では分娩・子牛育成管理に係るリスクの削減や市場等に頼らない望ましい産子の確保が可能となっている。

廣一氏は協会勤務時代から血統の研究に取り組み、現在の繁殖牛の基礎を構築した。現在は時代のニーズに合わせた血統を選別し、人工授精を自身で行うことにより自家産の肉質向上を図っている。受精卵移植にも取り組み（全体の約30%）、新たな血統の繁殖牛を残すため日々研究を重ねている。

また「Farmnote Color」からの通知を元に、獣医師等に依頼することなく迅速に人工授精を行うことで空胎期間および分娩間隔の短縮を実現している。令和6年の受精卵の販売収入は全体の約13%（約700万円）に達し、安定的な収入源となっている。

【「健全経営」の取り組み】

先代の急逝後、コロナ禍による枝肉価格の急落から経費削減の課題に直面したが、一貫

（表2）経営実績（令和6年）

経営の概要	労働力員数 (畜産・2000hr換算)	家族・構成員 雇用・従業員	2.5人 0.7人
	成雌牛平均飼養頭数		39.5頭
	飼料生産	実面積	468a
	年間子牛分娩頭数		30頭
	肥育牛 平均 飼養頭数	肉用種 交雑種 乳用種	101.5頭 0.0頭 0.0頭
	年間 肥育牛 販売頭数	肉用種 交雑種 乳用種	41頭 0頭 0頭
	収益性	所得率	23.0%
		出荷肥育牛1頭当たり生産費用	1,634,862円
	繁殖	成雌牛1頭当たり年間子牛分娩頭数 成雌牛1頭当たり年間子牛販売頭数 平均分娩間隔	0.76頭 0.00頭 12.7ヵ月
	生産性	肥育開始時 肥育牛 1頭当たり (黒毛和種・ 去勢若齢)	日齢（月齢） 体重 出荷時 出荷時生体重 平均肥育日数 販売肥育牛1頭1日当たり 増体重（DG） 対常時頭数事故率 販売肉牛1頭当たり販売価格 販売肉牛生体1kg当たり販売 価格 肉質等級4以上格付率※ もと牛1頭当たり導入価格 もと牛生体1kg当たり導入価格

経営の強みを生かして自家産牛の増頭に取り組み、外部導入費用の削減を実施した。もと畜費の軽減により経費削減を達成し、借入金に頼ることなく健全経営を維持している。また奈美氏は農業簿記を活用し、毎年の経営状況を把握。課題の改善に努めながら経営の安定化に貢献している。

【肉質の高品質化とアニマルウェルフェア】

新たな取り組みとして令和7年8月に「やまなしアニマルウェルフェア認証制度」を取得。山梨県は令和3年に全国自治体の中では



(写真5) やまなしアニマルウェルフェア認証制度

初のAW認証制度を設立し、現在本経営を含めて12農場が認証されている。認証はエフォート（取組（計画））認証とアチーブメント（実績（成果））認証の2段階認証で知識、取り組み宣言および現地調査でエフォートおよびアチーブメント基準を満たした農場が認証される。牛にストレスを与えないよう飼養管理および環境に配慮しており、暑熱対策や飼養環境向上のため肥育牛舎に設置されていた扇風機を令和4年から5年にかけて育成および繁殖牛舎に増設した。また、子牛には痛みを伴わない離乳用鼻かんをついている。通常、離乳は親牛と子牛を物理的に離すことで行うが、この鼻かんを付けることでお乳を飲もうとすると口がガードされ飲めなくなり、代わ



(写真6) 廣一氏と牛

りに飼料を食べるようになる。スムーズに離乳ができるため子牛のストレスが軽減される。離乳部屋のスペースがない時にも離乳できる利点もある。

日々の観察と愛情を込めた飼養管理および飼養環境向上により牛へのストレス軽減を実現している。

地域に対する貢献

【地域農業の発展支援】

山梨県肥育牛研究会（YHK）に所属。会員の14名はすべて甲州牛を生産している肥育および一貫経営者である。令和6年度は、南信州の味覚センター施設の見学や、全農くみあい飼料が所有する農場の視察に参加。廣一氏はこれらの機会を通じて積極的に交流を図り、知識や技術の共有を通じて地域全体の飼養技術および出荷成績の向上に貢献している。

また、堆肥は地域のニーズに応じて製造され、水稻栽培への活用や地元耕種農家と稻わらとの交換を通じて100%利用されている。稻わらの回収場所は大小合わせて73ヵ所に及



(写真7) もみ殻牛舎

び、重労働ではあるが地元産資材の利用に加え、北杜市の方針である地域資源循環の観点からも重要な取り組みと捉えている。さらに、水稻栽培で生じるもみ殻については、耕種農家から提供を受け、牛床資材として活用。焼却するしかなかったもみ殻を有効活用することで、地域資源循環の推進に寄与している。

【地域雇用の創出】

地元のハローワークに求人掲載を実施し、雇用（1名）につながった。令和5年には地元の獣医師志望高校生の実習を受け入れ、進学支援にも貢献。今年度は中学生の見学も受け入れ、地元学生のインターンも継続的に実施している。

【食育活動による次世代支援】

地元小学校の2年生の社会科見学を受け入れ、牛舎見学、給餌体験、稻わらロールクイズ、牛の一生を描いた手作り紙芝居などの食育講座を実施している。紙芝居では「牛の命をいただくことに感謝し『いただきます』、『ごちそうさま』というありがとうの気持ちをもってほしい」と語り、子どもたちは真剣な表情で耳を傾けていた。見学後には子ども

たちから「牛がかわいかった」、「餌やり体験が楽しかった」、「牛に触れてうれしかった」などの素直な感想文が毎年届けられ、楽しみのひとつになっている。

農場は地元保育園児のお散歩コースになってしまっており、園児に積極的に話しかけ、日々の交流を通じて畜産の魅力を伝えている。

女性の活躍・働きやすい 職場環境づくりの取り組み

奈美氏は子育てと仕事を両立しながら、県内の全畜種を対象とした「やまなし畜産女性の会」と肉用牛の女性の会「やまなしCOWOMAN」の主要メンバーとして活躍。やまなしCOWOMANは奈美さんが命名した会で、会員からはとても好評を得ている。令和5年から全国畜産縦断いきいきネットワークに加入。1年目は息子の広武君とともにいきいきネットワーク会員の「お友達」として参加。令和6年の2年目は会員として参加し、2分間スピーチでは牛に対する熱い思いを語った。令和6年には担い手育成事業として山形で開催された現地見学会にも参加。県外の生産者とも積極的に交流を深めている。



(写真8) 社会科見学



(写真9) 奈美氏作業



(写真10) やまなし畜産女性の会研修

また、家族で全国和牛能力共進会の見学にも出かけ、情報収集も積極的に行っている。奈美氏は県内外の研修に意欲的に参加し、幅広い知見を得る行動力がある魅力的な女性である。

さらに奈美氏を支える廣一氏と理解ある廣一氏の母も頼もしく温かみのある存在である。廣一氏の母が担う給餌作業は、体を動かすことで健康維持にもつながっており、牛とのふれあいは日々の喜びとなり、牛に関する話題は家族の食卓でも自然と共有され、一家団らんの時間をより豊かなものにしている。家族が週末に休暇を取得できるようパートを雇用し、仕事・子育て・県内外研修の時間を確保することでワークライフバランスが整った働きやすい環境を実現している。

将来の方向性

【持続可能な畜産業を目指して】

日々の飼養管理に真摯に取り組み、特に子牛の健康維持を目的として、適切なワクチン接種を含む徹底した管理を行っていきたいと考えている。加えて、持続可能な畜産経営の実現に向けて、自家産牛の増頭を進めること

で経営基盤の安定化を目指している。

また、地球温暖化など気候変動が懸念される中、今後も安定した牧草生産が可能となるよう牧草管理にも一層力を入れていく。

【畜産の魅力を次世代へ伝えたい】

廣一氏（53歳）と奈美氏（38歳）は県内では若手の畜産経営者として注目されている。次世代への継承を見据え、廣一氏は「甲州牛」の知名度向上を目指し、多くの人にその魅力を知ってもらいたいと考えている。YHK等県内の研究会に参加し、関係者と交流を深めながら情報交換と技術研鑽に励んでいる。奈美氏は県内外の生産者と交流しつつ、学生のインターン受け入れを継続的に実施しており、中学生・高校生等次世代の子どもたちに畜産の魅力を伝えていくことを大きな目標としている。さらに山梨県内では牛グッズを身に着ける等「牛好き」で知られており、SNSの活用や大好きな牛グッズの収集にも力を入れ、全国の牛好きとつながる夢を描いている。



(写真11) 牛と微笑むふたり